浪江のこころ通信

・第108号・

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト” は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第108号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

樋渡牛渡八坂神社 再建委員会役員

樋渡牛渡行政区長　**鈴木　辰行**さん（樋渡）
八坂神社宮司　**田村　友正**さん（北幾世橋）
八坂神社再建委員会委員長　**佐藤　安男**さん（牛渡）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：３月３日

八坂神社の再建とともに、集落の新しい歴史が始まる

樋渡・牛渡地区の人たちの心のよりどころだった八坂神社は、震災時に拝殿や本殿などが倒壊。様々な人たちの尽力により、足掛け５年の歳月をかけて、昨年、再建されました。10月13日には竣工落成式が開かれる予定でしたが、台風19号の豪雨被害により、今年の１月12日に延期。当日は、避難先などから地区の人たち約80人が駆けつけ、にぎやかに再建を祝いました。

大切な神社の行事である夏の例大祭の再開ももうすぐです。この再建の取組に中心的に関わってこられたお三方に、震災からこれまでの暮らしと、神社再建にまつわるお話を伺いました。

鈴木さん

田村さん

佐藤さん

◆皆さんの震災当時の様子や今の暮らしをお聞かせください

鈴木さん　その日は町議会に出席しており、地震発生直後に解散になりました。自宅に戻る途中、八坂神社の前を通ってみると、無残にも倒壊していました。真っ先に思ったのは「再建するのは大変だぞ」ということでした。自宅に戻ると納屋がつぶれ、停電のため自家水道も使えませんでした。翌朝、水くみなどをするうちに、原発事故の避難となり、津島方面に向かいましたが、渋滞で引き返しました。妻の姉が住む南相馬市原町区に行き、一週間ほど世話になりましたが、20キロメートル圏内であったため、家族４人で埼玉県の娘の家に１か月ほど避難しました。

その後、東京都の東雲住宅団地に移って５年過ごし、今は息子の家族と名取市に一緒に住み、樋渡と行き来しています。樋渡の家では、自家用のキュウリやスイカなどを作っています。

あちこちを転々としましたが、囲碁の趣味が功を奏して、碁会所仲間がすぐにできるんですよ。救いでしたね。

田村さん　建てて間もない家でしたが、瓦が落ちました。当時、民生委員を務めていたので、近所の高齢者の安否確認をしました。その日は役場の隣の体育館に避難したのですが、翌日すぐに原発事故で避難になりました。国道６号は上下線とも動かず、国道114号にも入れない。南相馬市原町区に住む妹を頼るために山回りで移動しましたが、そこもすぐに避難となり、飯舘村、福島市へと移った後、娘夫婦を頼って仙台市へ行きました。その後、白河市の妻の親戚宅の離れを借りることになりましたが、風が吹くと刃物で切られるような寒さなんですよ。そこで、浪江町に一番近いいわき市を選び、長男世帯と隣り合わせで住んでいます。家族や孫が頻繁に集まるので、楽しいです。

今は、皆さんが避難先で建てた家の地鎮祭が、宮司としての主な仕事になっていますが、この八坂神社と初発神社のことを考え、そろそろ幾世橋に戻ろうかと考えているところです。

佐藤さん　あの日は檀家の集いで富岡町夜ノ森に出掛け、帰りの車で地震に遭いました。双葉町では国道６号が大渋滞。山手に迂回しましたが、ここも道路の段差がひどく、約60分もかけて帰宅しました。家は屋根瓦が落下、家財道具などが倒壊しましたが、電気や水道は使えました。一晩中テレビで各地の震災状況を見ていましたが、特に岩手県陸前高田市の倒壊した家屋などが海水に流されながら燃えている光景は衝撃的でした。

翌日早朝、妻と車で請戸や幾世橋の様子を見に行く途中で避難指示を聞き、そのまま津島へ避難。体育館に二晩泊まりましたが、暖房も食べ物も無く、本当につらかった。二本松市に一斉避難をすることになり、岳下体育館に移りました。二本松市が準備してくださったのか、段ボールや毛布、食事もトイレも整備されていました。そこから群馬県前橋市の弟を頼って約三週間。その後、知り合いから「地元に戻らないと情報が得られないよ」と言われ、二本松市東和町の体育館へ移りました。ここは衣服や食品などの物資もあり、知人も多かったので気持ちが落ち着きました。

それから、耶麻郡北塩原村にある裏磐梯グランデコスノーリゾート、五色沼近くの秋元旅館と移動しました。旅館の皆さんにはいろいろな配慮をしていただき、８世帯の皆さんとカラオケや餅つきをしたり、健康のためラジオ体操もしたりしました。その後福島市に移り、今は避難８か所目の一軒家。子供たちも福島市で暮らしています。

〔神社と再建報告会〕
左上：竣工落成式当日の八坂神社
右上：参列者全員で記念撮影
左下：八坂会によって奉納された神楽
右下：樋渡牛渡田植踊保存会による田植踊り
（令和２年１月12日撮影）

◆八坂神社再建の発端、実現までの経緯などを教えてください

鈴木さん　佐藤さんが一番詳しいから、お任せしましょう。

佐藤さん　震災で神社が倒壊した当時から、「昔通りに復元したい」「簡素に祠だけでも」など、いろいろな声が上がっていました。平成27年５月、避難先の岳下体育館そばの岳下公民館に地区住民が集まり、大字総会を開いたときに、再建検討委員会を立ち上げました。大字三役や氏子代表５人（後に６人）、集落の各団体長、区長経験者など学識経験者と合わせて12人と、宮司さんの13人で構成。みんな、再建には賛成のようでしたが、高齢の皆さんと若い皆さんとでは思いが少し違いましたね。

施工業者の選定では会津建設さんとの出会いが大きかったです。きっかけは、自宅を建てた親戚を訪ねたときに会社案内カタログを見て、神社仏閣の施工実績を知ったことでした。役員で会社や加工場、材木保管所の見学に行ったり、また福島市や川俣町、南相馬市鹿島区の山田神社など数か所の視察を行ったりしました。

再建の財源は、東京電力ホールディングス株式会社からの賠償金が約66パーセントで、田村さんが交渉から契約まで行ってくださいました。また、共有地からの一括寄付や50数件にもおよぶ個人寄付が約32パーセントと、寄付予算の約２・３倍もいただきました。さらに福島県神社庁の助成金です。おかげさまで、参道の整備や土留めなどの付帯工事もできました。個人寄付がこれほど集まったことに、改めて皆さんの神社への思いを感じました。集落のお墓への通り道にある神社には幼い頃からの思い出などがあって、心のよりどころなんでしょうね。

再建検討委員会は再建準備委員会となり、最後の約２年は再建委員会へと名称を変えながら、約５年の歳月をかけ、昨年８月５日に完成、引き渡す予定でした。しかし、10月に予定した遷座式や落成式は台風の影響で今年１月12日に延期となりました。雨天続きで心配でしたが「終わりよければ、すべてよし」。見事な晴天となりました。神楽と田植踊りを奉納できて本当によかったです。

鈴木さん　八坂会による神楽と田植踊保存会、いずれも今は８人です。以前、田植踊保存会が小学生に教えていた頃の若い人たちも参加して、70代から20代、育てた人たちと習った人たちが一緒に踊りました。離れ離れになっているため、練習や行事に集まることが大変です。引っ張ってくれるリーダーと協力してくれる人たちがいなければ継続できないと思います。地域の芸能を継承していくには、地域と町の全面協力が必要ではないでしょうか。

◆最後に、八坂神社への思いを聞かせてください

鈴木さん　この神社は彫り物が自慢で、再建にその一部を使いましたが、先達が残してくれた大切な神社を、私たち世代が次へつないでいきたい。浪江町に戻る、戻らないは別として、地元に来たときはいつでも神社にお参りできるようにしたいですね。

田村さん　集落の再建は難しいかもしれませんが、５年後、10年後という長いスパンで若い人たちに伝えながら、復興を成し遂げていただきたいですね。

佐藤さん　神社と住民のつながりというか、どこにいても古里を思う気持ちになってほしいです。「家に帰るか」と言う人が一人、二人と増えていくような、復興の象徴となれたらいいですね。新しい機会をつくることができれば、みんなが集まって話すこともできるでしょう。７月には夏の例大祭も再開しますよ。